

コンピテンシーベース教育の意味と 教科内容が果たす役割

胸組虎胤

(キーワード：コンピテンス、コンピテンシー、教科内容)

1. 緒論

近年、「コンテンツベースの教育(contents-based education)からコンピテンシーベースの教育(competency-based education)へ移行すべきである」という教育的視点が議論されている¹⁻¹¹⁾。しかし、この表現には(1)用語の意味と使い方に関する不明瞭な点と(2)教育本来の目的にそぐわない欠点が存在すると見ることもできる。

(1)不明瞭な点はまず、コンピテンス(competence)とコンピテンシー(competency)の意味とこれらの関係性である。心理学におけるコンピテンスについては、White が“competence will refer to an organism’s capacity to interact effectively with its environment,”と定義した。これは「生命体(organism)がその環境に効果的に適合して生き残る能力」という概念を、従来の competence に導入したことを意味し、彼はそれを人間に適用した^{12,13)}。一方、コンピテンシーは語尾の-cy が意味する職業における能力(「職能」)に由来する言葉である^{10,11,14)}。しかし、日本ではこれらが区別なく同様な意味で使われ⁹⁾、学校教育に直接結びつけて論じられている。これはコンピテンスとコンピテンシーの本来の意味を理解した上で、意味の転換が行われたためか、それとも単数形と複数形の扱いも含めた誤解が原因なのであろうか? コンピテンス(competence)の複数形はコンピテンシズ(competences [kámpətnsɪz])であり、コンピテンシー(competency)の複数形はコンピテンシーズ(competencies [kámpətnsi:z])である。これらの用語の複数形の違いは、語尾に近い‘c’の後に‘i’があるかないかであり、視覚的に区別しづらいし、発音もよく似ている。日本人が英語論文を読む際に、これらの複数形を誤りあるいは混同したことで、それを訳して表現する際に誤りが生じたかもしれないという疑問も残る。これに関連したことで、competency-based ではなく competence-based という表現を使う論文も見受けられる¹⁵⁻¹⁷⁾。

もう一つの不明な点は、コンテンツベースの教育(contents-based education)とコンピテンシーベースの教育(competency-based education)の関係性である。歴史的に見ると、前者が古くから使われてきた教育の方法であるが、これらは全く別の教育方法か、両者には関連があって後者を強調すべきか、あるいは前者は不要で後者だけにすることを求めているか等は不明である。この疑問は(2)の疑問にも関連する。

(2)教育本来の目的に合わない欠点ではないかという疑問は、コンテンツ(contents, 教科内容)を基礎とせず、コンピテンシー(職能に由来)を基礎とすべきとしている点である。本来、教科内容は職業での職能育成のために構築されたものではない。教科内容は、学ぶ人に応じて学問分野の内容と系統性を伝え、学ぶ人が正しい認識を持ち、さらには何かを生み出せることを目的に、学問分野内容を再構成したものである。そこが学問分野(Discipline)と教科(Subject)の違いと考えられる。これらのことから「コンピテンシーベースの教育」が目標となると、以下のような様々な疑問(①~⑤)が生まれる。

①コンピテンシーの多様性と変化： コンピテンシーは、学ぶ人が目指す方向性、職業、時代等によって変化するのではないだろうか?

②コンピテンシーへの役割は教科で異なる： 築かれるコンピテンシーは教科により異なるかもしれないし、一見同じようなコンピテンシーの育成が推測されても、コンピテンシーの発揮と表現の形が異なるかもしれない。また、教科横断の条件ではどうなるのであろうか?

③コンテンツは現状維持か改変か： 教科の種類と内容は現状のままで教科毎に異なるコンピテンシーを目指すのだろうか、あるいは教科内容とその構成が異なってくるのだろうか? 学問分野を基礎に作られた全ての教科内容を再構成して、「コンピテンシーベースの教科」とすることと捉えられないこともない。

④コンテンツの欠落発生： 教科毎の系統性と教科内容間の関係性があっても、それらのことが従来の教科内容から抜け落ちて、学ぶ人に伝えられない箇所が生まれないだろうか?

⑤新しいコンテンツと教科の創出： 今後新しいコンピテンシーが求められ、従来の教科によってその育成が無理と判断された場合、新しい教科を創出できるのであろうか？

①と②はコンピテンシーとコンテンツあるいは学ぶ人との関係についてである。③と④はコンピテンシーベースの教育によって生じる現象の推定である。⑤はコンピテンシーベースの教育のさらなる展開によって生じるコンピテンシーとコンテンツとの関係の変化である。

本稿では以上の多くの疑問点に関する考察を進める。2章ではコンピテンズ(competence)とコンピテンシー(competency)の意味の違いを、語源、使われ始めた当初とその後の意味の変化も含めて考察する。3章ではコンピテンシーベースの教育について議論する。4章ではコンピテンシーベースの教育が行われた場合のコンテンツの役割について考察する。ただし、コンピテンシーへの教科毎の役割の違いと教科横断の影響については、本稿とは別の機会に論じる。5章ではこれらの考察からの結論をまとめる。

2. コンピテンズ(competence)とコンピテンシー(competency)

2-1. 英語のつづりと本来の意味と語源

英語を母語とする人間にとっては、コンピテンズ(competence)とコンピテンシー(competency)の本来の意味の違いは明白なのかもしれない。少なくとも、このつづりから想像する意味の違いは思い浮かぶかであろう。しかし、つづりの違いから抱く内容には人によって幅がある可能性もある。一方、英語を母語としない人間はこれらの区別はつかないだろう。英語を母語とする人も含め、多くの人が区別しにくいという仮定のもとで、まずはこれらの単語の本来の意味の違いについて探っていく。

2-1-1. 簡潔な辞書に書かれた意味の違い

まず、簡潔な辞書(concise dictionary)¹⁸⁻²⁰⁾に書かれた内容の例を表1に示す。competence と competency の意味については、多くの英語辞書で competent の名詞形(形容詞 competent であること)と表記されている。competent は形容詞であり、「適応している、適切な、目的に合っている、妥当な、十分能力がある」とある¹⁾。一方、最近の使われ方について詳しく記された英辞郎第11版²¹⁾では、competence は「能力、力量、適性、権限；ちょっとした資産；言語能力」とあり、competency は「資格、能力」以外に「職務で一貫して高い業績を出す人の行動特性のこと」とある。ここでは区別がされている。

表1. 簡潔な辞書に記された 'competence' と 'competency' および 'competent' の意味

簡潔な辞書	competence	competency	competent
<i>Concise Oxford Dictionary</i>	ability to do something; the ability for a task	ability to do something; the ability for a task	
<i>Macquarie Concise Dictionary</i>	"the quality of being competent", where competent means "properly qualified" or "capable". Noun of 'competent'		Fitting, suitable, or sufficient for the purpose; adequate
<i>Sanseido's Concise English Dictionary</i>	Fitness, ability	Fitness, ability	Fit, able, adequate
英辞郎第11版	「能力、力量、適性、権限；ちょっとした資産；言語能力」	「資格、能力」 「職務で一貫して高い業績を出す人の行動特性のこと」	【形-1】〔人が仕事などにおいて〕有能な、能力がある、適任な 【形-2】〔能力などが目的のために〕十分な、要求にかなう 【形-3】《法律》法的能力〔資格〕を有する 【形-4】《法律》管轄権を有する 【形-5】《生化学》〔細胞や組織などが〕適格性〔受容能力〕がある

この表1に書かれた言葉の説明は、日本人がその意味をある程度識別するには役立つかもしれないが、本来の語源と詳細な意味の違いについての十分な記述を含まない。ここで語源を含めた内容と、現在の教育関係での使用方法等を見ることが、これらの用語の本質的な意味の違いを区別することに有用であると考えられる。

2-1-2. 語源も分かる詳細な辞書に書かれた意味の違い

語源と使用開始時期等について、Merriam-Webster の Web 上に掲載された辞書²²⁾に詳しい(表 2)。

表 2. Merriam-Webster に書かれた単語の説明

語句	competence	competency	competent	compete
意味の説明	<p>1: the quality or state of being <i>competent</i>: such as</p> <p>a: the quality or state of having sufficient knowledge, judgment, skill, or strength (as for a particular duty or in a particular respect)</p> <p>b <i>law</i> : legal authority, ability, or admissibility</p> <p>c: the knowledge that enables a person to speak and understand a language</p> <p>d <i>biology</i>: the ability to function or develop in a particular way: such as</p> <p>(1)<i>embryology</i> : the ability of embryonic cells and tissue to undergo differentiation in response to an organizer (see ORGANIZER SENSE 2)</p> <p>(2)<i>microbiology</i> : the capability of bacterial cells to take up exogenous DNA during genetic <i>transformation</i></p> <p>2: a sufficiency of means for the necessities and conveniences of life" ... money can only give happiness where there is nothing else to give it. Beyond a <i>competence</i>, it can afford no real satisfaction ... " — Jane Austen</p>	<p>1: COMPETENCE: such as</p> <p>a: possession of sufficient knowledge or skill Dr. Polidoro was cited for his outstanding contributions to the profession, his professional...<i>competency</i>...and dedication.— Rhode Island At length horrible doubts overtake him as to the captain's <i>competency</i> to navigate his ship.— Herman Melville</p> <p>b: legal authority, ability, or admissibility They evaluated the defendant's <i>competency</i> to stand trial.</p> <p>2: a specific area of competence A "meister," or master, who works with the student at the jobsite will then be able to check off when an apprentice has achieved certain <i>competencies</i>.</p>	<p>1: proper or rightly <i>pertinent</i></p> <p>2: having requisite or adequate ability or qualities : FITa <i>competent</i> teacher a <i>competent</i> piece of work</p> <p>3: legally qualified or adequate a <i>competent</i> witness</p> <p>4: having the capacity to function or develop in a particular way: such as</p> <p>a: having the capacity to initiate an <i>immune response</i> following exposure to an antigen antibody production by immunologically <i>competent</i> B cells</p> <p>b: of a bacterial cell : capable of taking up exogenous DNA (as from a plasmid) during genetic <i>transformation</i> natural and artificially-produced <i>competent</i> cells</p>	<p>Definition of <i>compete</i></p> <p>intransitive verb</p> <p>: to strive consciously or unconsciously for an objective (such as position, profit, or a prize) : be in a state of rivalry competing teams/companies competing for customers</p>
歴史と語源	<p>First Known Use of <i>competence</i> circa 1640, in the meaning defined at sense 2 History and Etymology for <i>competence</i> see COMPETENT</p>	<p>First Known Use of <i>competency</i> 1600, in the meaning defined at sense 1 History and Etymology for <i>competency</i> see COMPETENT</p>	<p>First Known Use of <i>competent</i> 15th century, in the meaning defined at sense 1 History and Etymology for <i>competent</i> Middle English, suitable, from Anglo-French & Latin; Anglo-French, from Latin <i>competent-</i>, <i>competens</i>, from present participle of <i>competere</i> — see COMPETE</p>	<p>First Known Use of <i>compete</i> 1620, in the meaning defined above History and Etymology for <i>compete</i> Late Latin <i>competere</i> to seek together, from Latin, to come together, agree, be suitable, from <i>com-</i> + <i>petere</i> to go to, seek — more at FEATHER</p>

辞書に書かれた意味に関する記載事項を敢えて原語(英語)で書いた。これは本稿の著者が日本語に訳した内容を記述するだけでなく、本来の意味を英語でも理解し正しく伝えるためでもある。本稿での議論を進めるにあたり、この内容を日本語に訳して、これらの用語の意味の違いと語源等について考える。

まず、'competence'の意味であるが、1.において、「competentである資質またはその状態」とある。aでは「十分な知識、判断、スキル、または精神力をもつ資質またはその状態」、bでは法律に関して「法律的な権限、手腕、許容性」、cでは「人が言語を話し理解できるようにする知識」、dでは生物学に関して「特定の方法で機能し発展する能力」とし、その方法として、(1)で「発生学：細胞と組織が1つの形成体に依じて分化する能力」、(2)で「微生物学：形質転換の間に外因性のDNAを取り込む萌芽細胞の能力」とある。2.において、「生活の必要性と利便性を果たす財力が充足していること」とあり、この意味に関連した使い方の例として、「…他に何もないところではお金だけが幸福を与える。財力の充足を超えたところでは、お金は本当の満足を決して与えない」。また、歴史と語源の欄にあるように、この文(sense 2と表示)は1640年に'competence'が最初に使われた時と同じ意味で使われている。

次に、'competency'については、1.で'competence'を意味するとあり、aでは「十分な知識またはスキルを持つこと」、bでは'competence'で書かれた内容と同じで、「法律的な権限、手腕、許容性」とある。しかし、2.では「competenceの特定の領域」と書かれている。その例文として、「専門家とか親方は、仕事現場で見習いと一緒に仕事をして、その見習いが一定のcompetenciesを達成したときに、チェック済みの印を付ける」とある。ここで、'competency'と'competence'の意味の違いが明確になった。'competency'が'competencies'という複数で書かれていることも含めると、'competence'が複数の'competency'という構成要素からできていることが分かる。つまり、'competence'は全体像であり、'competency'は'competence'の特定の構成要素のことである。また、歴史と語源の欄には、1.にある文(sense 1)は1600年に'competency'が初めて使われたことを意味する。

それでは、‘competence’と‘competency’の両方の語源となっている形容詞‘competent’はどうであろうか。1.では「適切あるいは当然の」、2.では「必要あるいは十分な能力または資質を持っている」、3.では「法的に適切あるいは十分な」、4.では「特定の状況で機能するか、あるいは発展する能力がある」とある。4.の特定の状況の例として、a「抗原にさらされた後に、免疫反応を初期化する能力を持っている」、b細菌については、「形質転換の間に外因性のDNA（プラスミドなどから）を取り込む能力」と書かれている。また、歴史と語源の欄には、1.にある文(sense 1)は15世紀に‘competent’が初めて使われたことを意味する。これは中英語に該当し、英仏語とラテン語が語源である。ラテン語の‘competent’-と‘competens’から来た英仏語であり、‘competere’の現在分詞に由来する。「‘compete’を見ろ」とある。

最後に、‘compete’については、「意識または無意識に目的（地位、利益、賞など）のために競争する」とある。1620年に最初に使用され、そこでの意味はこの内容である。後期ラテン語の‘competere’は「いっしょに探す」を意味する。ラテン語の由来は「いっしょに来る、同意する、適切な」を意味する com-（いっしょに）と petere（聞く）を足し合わせた語がであり、「行くこと、探すこと」を意味する。

2-1-3. Indeed で説明されている competence と competency の意味の違いと使い方²³⁾

Indeed は就職サイトであり、現在よく使われている英語の意味と使い方についての詳細な説明がなされている。いくつか内容項目（サイト）があり、意味の区別が理解しやすい **Competence vs. Competency: What's the difference?** を紹介し、考察していく。ただし、原文は大部となるため、重要である箇所を抽出し、日本語の訳をここに示して比較する。

Competence vs. Competency: What's the difference? についての記述²³⁾

「‘Competence’とは、基本水準にあるどんなことでも大まかに理解し行動できるあなたの能力である。このこと(competence)はあなたの知識と存在状態全般に関係する。‘Competence’は通常、学習と理解に結びつくスキルに関係している。それは、スキルと知識を測定するための基準を含んでいる。たとえば、典型的には基本的な綴り書きの試験は、一般的に使われる単語を綴るための、あなたの能力あるいは‘Competence’を測定する。‘Competence’は生活の異なる場面（部分）すべてを通じて、行動と知識を理解する能力のことにも触れている。これは、あなたが年を経て、新しいことを学び、新しい人たちに会い、新しい環境を経験するというあらゆる局面で、‘Competence’が生じることを意味する。これはまた、あなたの生活や経験の各局面で起こる基本的な責任や要求を理解することを含む。」

この説明の中で、「これは、あなたが年を経て、新しいことを学び、新しい人たちに会い、新しい環境を経験するというあらゆる局面で、‘Competence’が生じることを意味する」とあり、人間が生きていく能力全般を意味している。

一方、‘Competency’とは以下のようにある。「仕事の語彙での‘Competency’とは、あなたが訓練を受けた特定の仕事をやる能力に関係する。その用語を「専門スキル」を意味するもう一つの単語として用いるかもしれない。たとえば、コンピューターサイエンスで学位を取得するとか、ソフトウェア工学の会社の新しい職で訓練を受けた後に、‘Competency’を得るかもしれない。‘Competency’は、行動自体とこれらの能力の獲得方法に関係するかもしれない。ある分野とか会社での訓練や勉強の後、多様な‘Competency’を獲得できる人もいる」。つまり、仕事をする際に、職業訓練等で得られる能力を意味する。

したがって、‘Competence’は人間の能力全般、‘Competency’は‘Competence’の一部であり、職業に関する内容であると言える。

2-2. 教育心理学による Competence と Competency の概念提示

2-2-1. White による competence の新しい概念提示

Competence については White による1959年の総説論文が知られている^{12,13)}。本稿の最初にも、competence の定義として“competence will refer to an organism’s capacity to interact effectively with its environment,”「コンピテンスとは生命体(organism)がその環境に効果的に適合して生き残る能力を指す」を引用した^{12,13)}。White の論文では、Competence について、生物（生命体）が環境に適合する能力の説明からそれを人間に適応した内容へと展開している。彼は、生命体全般に備わる能力であると広く捉えた上で、哺乳類、特に人間の学習と結びつけ

て論じた²⁴⁾。その上で、「環境と効果的に相互作用するという、人間の資質」に対して「コンピテンス (competence)」という概念を導入した²⁴⁾。White はコンピテンスの意味について、「環境に対処することを学ぶ術となるこれらの多様な行動をひとつの名称でくくるような習慣はない。」「これらの行動はすべて環境と効果的な相互作用に資するものである—を、「コンピテンス」と総称することを提案する」としている¹³⁾。また、ウェブスターの英語辞書にある competence の意味を引用して、「適性(fitness), 能力(ability)があり、同義語として素質(capability), 達成する能力(capacity), 効率・要領の良さ(efficiency), 熟練(proficiency), 技能(skill)」があることを示した^{12, 13)}。その上で、「コンピテンスという語は、つかむこと、探索すること、這うこと、歩くこと、注意や認知を集中させること、言語や思考、操作すること、そして、周囲に変更を加えることなどを形容する言葉として適切である—これらの活動は、いずれも環境との効果的(effective)な、そして有能(competent)な相互作用を促進するものである」としている¹³⁾。これは、「コンピテンスは動機づけの概念として捉えるべきだ」と主張している¹³⁾。‘Competence’という言葉に、人間の能力に関連する概念を加えたことになる。さらに、competence の動機づけの概念として effectance (エフェクタンス) を提案した上で、エフェクタンスの主観的・情緒的側面として得られる体験として feeling of efficacy (効力感) も提案した。White の考え方を概念図として図 1 に示す。

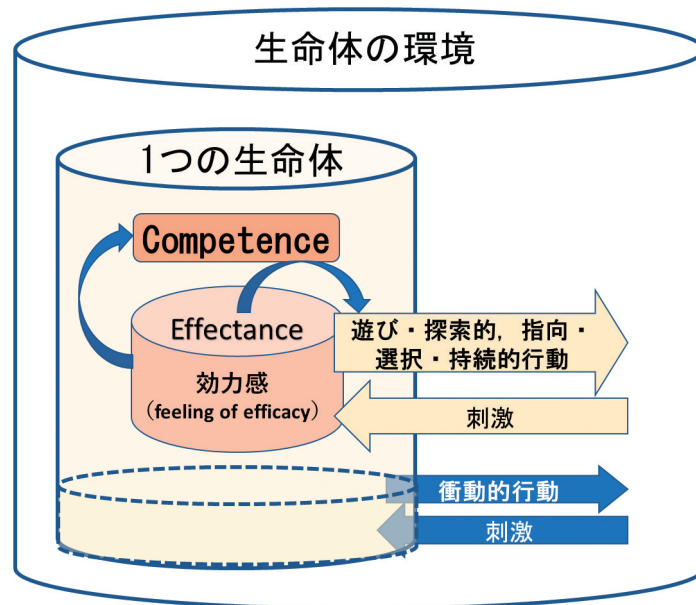


図 1. White により概念化された competence と行動をもたらす動機づけ(motivation)の側面

衝動的な行動ではなく、遊びも含め、探索的、指向・選択・持続的行動を行うと、環境から刺激を受けて効力感を味わう。その効力感を味わうことは、行動により自分が環境に適合した事を意味する。効力感を味わえるように行動できる能力が、‘Competence’である。つまり、‘Competence’とは、効力感を味わえることが動機づけとなって、自分の行動を環境に適合するように制御できる能力であるといえる。

2-2-2. McClelland による Competency の概念提示

マクレラン(D. McClelland)は1973年の論文¹⁴⁾では、‘Testing for competence rather than for “Intelligence”’ という表現 (論文名) の中で「コンピテンス(competence)」を使用し、その内容を‘real competence in many life outcomes’ と説明し、‘competence’の特性を暗示している。その論文では、‘a general kind of competence’; ‘a more developed competency’; ‘competencies involved in clusters of life outcomes’ という特徴的な表現をしている。これらの表現は、本稿著者が以前考察した以下の内容²⁴⁾と一致している。

「ここで、-ce という語尾は抽象名詞の語尾であり、-cy という語尾は状態、性質、職、位、身分に関する抽象名詞の語尾である。また、competencies は competency の複数である。以上のことから、competence は環境と効果的に相互作用する人間の資質・能力一般の概念であり、competency は competence の中ですぐれた職位、身分にある人間の資質・能力であり、competencies は competency が複数あることを示していると考えられる」²⁴⁾。

また、“Competence at Work”という書籍¹⁰⁾のPART IにMcClellandが書いた内容には、‘Competency’についての研究を始めた経緯が書かれている。McClellandは1973年‘Testing for competence rather than “intelligence”’という論文で、「旧来の学問的適性テストや知識内容テスト、さらに学校の成績や資格証明書は、1. 職務上での業績や人生における成功は予測し得ない。2. マイノリティー、女性、あるいは低い社会経済的階層出身の人たちに不利をもたらすことが多い。」ということを示す研究者の論文を紹介した。その論文は「コンピテンシーについての考え方とさらなる研究を生み出すきっかけとなった」。McClellandは「コンピテンシーの変数を明らかにする研究方法を求めはじめた」。しかし、原著の第I部のタイトルである“Part I The Concept of Competence”が、翻訳書では「第I部コンピテンシーの考え方」とされていた¹¹⁾。このことは翻訳ではコンピテンスとコンピテンシーを同じ概念と理解しているとみられるが、実際にはコンピテンスとコンピテンシーは意味が異なるので、この訳は誤りではないかともとれる。

“Competence at Work”の第2章では、‘A competency is an underlying characteristic of an individual that is causally related to criterion-referenced effective and/or superior performance in a job or situation.’「コンピテンシーとは、ある職務または状況に対して、基準に照らして効果的、あるいは卓越した業績を生む原因として関わっている個人の根源的特性である」としている^{10,11)}。これはコンピテンシーが職業に関する能力であることを示している。また、コンピテンシーの5つの特性：1. 動因(Motives)；2. 特性(Traits)；3. 自己イメージ(Self-concept)；4. 知識(Knowledge)；5. スキル(Skill)。本稿ではこの詳細について記載することは避けるが、職業で必要とされる能力の要素である¹¹⁾。

3. コンピテンシーベースの教育(competency-based education)

簡易的な英語辞書に書かれた‘Competence’と‘Competency’については、大きな意味の違いは見出されなかった。一方、詳細な英語辞典による意味の説明および職業に関わるサイト(Indeed)では、これらの単語には意味の違いが示されていた。次に、コンピテンシーベースの教育の歴史の点から見ていく。

3-1. コンピテンシーベースの教育の歴史

新しい「総合的な学習の時間」の学習指導要領の執筆に関わった奈須正裕氏の著書⁹⁾に、「2012年から四年間に渡って、「資質・能力」を基礎とした教育、いわゆる「コンピテンシーベースの教育について、時に学術的に、時に行政的に、あれこれと考えを巡らせる機会をふんだんにいただいたこととなります」とあり、「コンピテンシーベースの教育」は資質・能力を基礎とした教育を意味することがわかる。奈須はその著書で、コンピテンシーベースの教育が資質・能力の教育につながった経緯を詳しく述べている。その内容とともに、21世紀型スキルに

表3. コンピテンシーベース教育の歴史

年月日等	事項	国等	備考	文献 No.
1961年	ブルナーの『教育の過程』	アメリカ	教育の構造化	9)
1996年	「生きる力」の提起	日本	学習指導要領での提案へ	9)
1999年	キー・スキル	イギリス	職業能力に有効な「コア・スキル」(1983)から変更	8)
1997～2003年	DeSeCo キー・コンピテンシー	OECD		8)
2005年	EUのコンピテンシー	EU	New Basic Skill から Key Competencies への変更	8)
2009年	21世紀型スキル	アメリカ		8)
2011年	キー・スキルへの批判	イギリス	「スキルや能力は内容を伴う文脈で教えなければ」	8)
2014年3月31日	論点整理	日本	「生きる力」の不明確さについて	9)
2014年11月20日	文部科学大臣諮問	日本		9)
2015年8月26日	論点整理	日本		9)
2017年3月31日	新学習指導要領告知	日本	資質・能力の育成を目指す	9)

関する松尾の著書とともに内容を表にまとめた(表3)。

これらの記述は基本的に教育によって資質・能力の育成を目指すことが、海外でも日本でも一般化したことを示している。奈須らの著書では、コンピテンシーにつながる人間の生きる力についての考察は、ブルナーの『教育の過程』から始まったとする考えを示している。「生きる力」は前々回の学習指導要領改訂に反映された。その後、キー・スキル、DeSeCoのキー・コンピテンシー、EUのコンピテンシー、21世紀型スキルという考え方の影響もあり、教育の目的は教育内容を伝達することから、能力を目指す方向に舵が切られた。しかし、その際、「生きる力」という用語の不明確さが取り上げられ、その具体的な内容が議論された。その成果として、教科毎の資質・能力という考え方が強調された。この資質・能力は「生きる力」を具体的に示した内容であり、コンピテンシーを意味していると捉える事ができる。しかし、このような状況にあっても、2011年にイギリスでキー・スキルへの批判が高まり、「スキルや能力は内容を伴う文脈で教えなければ」という方向でのナショナル・カリキュラムの改革が進んでいた⁸⁾。コンピテンシー中心の教育に完全移行することで、コンテンツの教育が部分的にも失われることを危惧したためであろう。

3-2. OECD DeSeCo プロジェクトのキー・コンピテンシー

3-2-1. DeSeCo プロジェクトから見たコンピテンシとコンピテンシーの違い

表1に示したように、OECD (Organization for Economic Co-operation and Development: 経済協力開発機構)のDeSeCoプロジェクトのキー・コンピテンシーが比較的古くから知られている。DeSeCoは、Definition & Selection of Competencies: Theoretical & Conceptual Foundations (コンピテンシーの定義と選択: その理論的・概念的基礎)の略号である。DeSeCoのプロジェクトで重要な役割²⁵⁾を果たしたD.S. RychenとL.H. Salganikの著書¹⁾にある二つの例(以下)にはコンピテンシとコンピテンシーの両方が使われている²⁶⁾。

(1) コンピテンシへの機能的アプローチ¹⁾

A competence is defined as the ability to successfully meet complex demands in a particular context through the mobilization of psychosocial prerequisites (including both cognitive and noncognitive aspects). This represents a demand-oriented or functional approach to defining **competencies**. The primary focus is on the results the individual achieves through an action, choice, or way of behaving, with respect to the demands, for instance, related to a particular professional position, social role, or personal project(文献¹⁾のp.43).

「心理社会上の前提条件が流動する状況で、固有の文脈に対して、その複雑な需要にうまく対応する能力として、**コンピテンシ**は定義されている(認知的・非認知的の両面を含む)。これは**コンピテンシー**を定義するための受領志向アプローチや機能的アプローチを象徴している。行為、選択や行動の仕方を通して、需要に対する個人の達成結果に第一の焦点がおかれる。その需要は特定の専門的地位、社会的役割、もしくは個人の計画と関連づけられる。」²⁵⁾

(2) そして文脈への依存¹⁾

In summary, the underlying model of competence adopted by DeSeCo is holistic and dynamic in that it combines complex demands, psychosocial prerequisites (including cognitive, motivational, ethical, volitional, and social components), and context into a complex system that makes competent performance or effective action possible. Thus, competencies do not exist independently of action and context. Instead, they are conceptualized in relation to demands and actualized by actions (which implies intentions, reasons, and goals) taken by individuals in a particular situation.(文献¹⁾のpp.46-47)

「要するにDeSeCoによって採択されたコンピテンシの基礎となるモデルは、包括的(ホリスティック)で動的なものである。その中では、複雑な需要、心理社会的に不可欠なもの(認知的で、動機づけとなり、倫理的で意志的、および社会的な要素)、高い実行能力を効果的な行動を可能にする複雑なシステムの中での文脈に組み合わせている。このように、コンピテンシーは行為と背景のそれぞれと別個には存在しない。そうではなく、コンピテンシーは需要との関わりの中で概念化され、また特定の場面における個人の行為(意志、理由、目標も含む)によって実現されていくものである。」²⁶⁾

ここに紹介した著書を詳細に読んでも、コンピテンシとコンピテンシーの意味の違いについての明確な説明は見当たらない。しかし、これらの用語には意味の違いが自明の理であるかのように、使い分けがなされている。

その一つとして、原文では competence を competences（複数）で使っていないが、competency については複数形の competencies を使っている。「これは competence は大枠の概念であり、competency は人が個々の状況に合わせて環境に適応する能力の要素を示しており、その要素は様々であるので複数形が使われている」と解釈できる。このように捉える事は、すでに辞書的に調査した意味の違い、心理学的な定義の違いとも一致する。

3-2-2. DeSeCo プロジェクトから見たキー・コンピテンシー

DeSeCo プロジェクトは、キー・コンピテンシーの「キー」（鍵を握る）の意味について論じている。その中で、国際的に、「『キー・コンピテンシー』という用語は、『中核的能力』、『スキル』、あるいは『教育目標』などの用語と交換可能なものとして使われることがしばしばである。」としている。その上で、「『キー』という言葉の方が何らかの意味、信頼性、あるいは有用性をもつとするなら、650ものキー・コンピテンシーが存在するはずがない」として、「本章はキー・コンピテンシーに関する DeSeCo の全体的枠組みの重要な要素を示す」としている^{1,2)}。そこから、DeSeCo で定義されたキー能力の概念は3つの一般的基準に基づいているとして（表4）、キー・コンピテンシーを次の3つとした^{1,2)}（表5）。

表4. キー・コンピテンシーの基準

基準の内容	
(1)	キー・コンピテンシーは全体的な人生の成功と正常に機能する社会という点から、個人および社会のレベルで高い価値を持つ結果に貢献する (Key competencies continue to highly valued outcomes at the individual and societal levels in terms of an overall successful life and a well-functioning society.)
(2)	キー・コンピテンシーは幅広い文脈において、重要で複雑な要求や課題に答えるために有用である (Key competencies are instrumental for meeting important, complex demands and challenges in a wide spectrum of contexts.)
(3)	キー・コンピテンシーは全ての個人にとって重要である (Key competencies are important for all individuals.)

表5. キー・コンピテンシーの概念

方向性	構成要素
(1) 社会的に異なる集団での交流	①他者とうまく関わる力；②協力する力；③対立を処理し、解決する力
(2) 自立的に活動すること	①「大きな展望」の中で活動する力；②人生計画と個人的なプロジェクトを設計し、実行する力；③自らの権利、利益、限界、ニーズを守り、主張する力
(3) 道具を相互作用的に活用すること	①言語、シンボル、テキストを相互作用的に活用する力；②知識や情報を相互作用的に活用する力；③技術を相互作用的に活用する力

4. コンピテンシーベースの教育が行われた場合のコンテンツの役割

4-1. コンテンツ、資質・能力、コンピテンシーとの関係

学習指導要領総合学習の執筆者の著書には、「内容と資質・能力はあれかこれかの対立図式ではなく、個別具体的な内容について学ぶことを通して汎用的に機能する資質・能力を育成するという関係にあります。」⁹⁾「内容と資質・能力は対立するどころか、相互依存的であると同時に相互促進的な関係にあります。」⁹⁾という記述がされている。ここで、「内容」はコンテンツであり、「資質・能力」は各教科での学びにより獲得でき、「汎用的に機能する資質・能力」であるコンピテンシーにつながられる。したがって、コンテンツとコンピテンシーは対立関係になく、相互依存的で相互促進的であることを表現している。

「資質・能力」は認知的能力（内容知と方法知）と非認知的能力で構成されている。認知的能力（内容知と方法知）は各教科の学びによって得られる「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」であり、各教科特有の考え方に基づいている。非認知的能力は「学びに向かう力・人間性」に相当する。コンピテンシーは特定の文脈で汎用的に機能する能力であり、教科の内容から生まれる「資質・能力」から導かれると見ることもできる。しかし、教科以外の内容からの資質・能力も否定できない。そのため図2に、教科以外の内容もコンテンツとして広く捉えた概念図を示す。

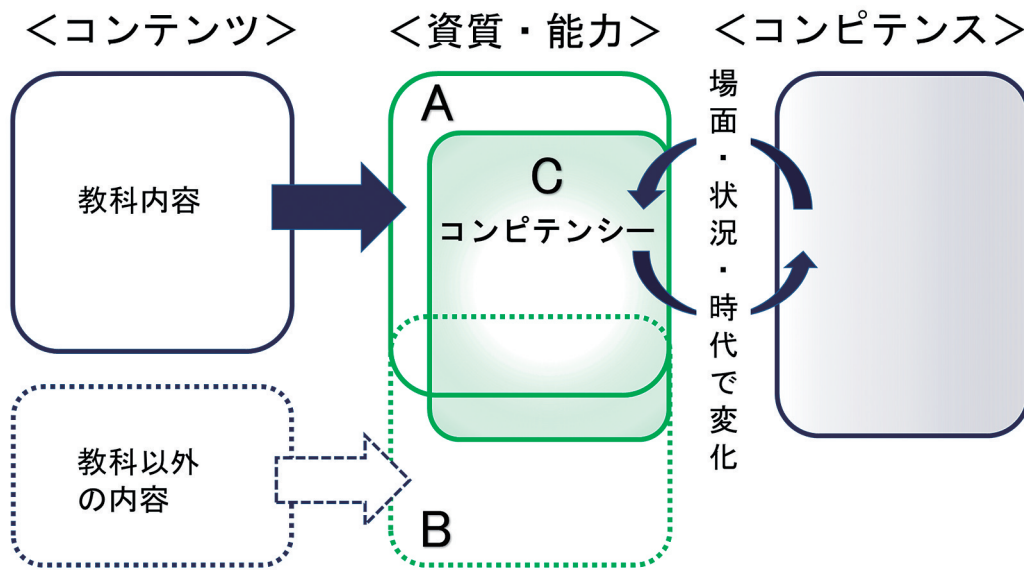


図2. コンテンツから生まれる資質・能力，コンピテンシー，コンピテンシとの関係

教科内容からは資質・能力 A が，教科以外の内容からは資質・能力 B が生まれると仮定して，これらが重複した資質・能力（A の実線と B の点線の両方に囲まれた領域）もあると考える。また，コンピテンシーを意味する資質・能力 C は，必ず資質・能力 A と B 一方または両方から構成されることになる。ただし，資質・能力 C（コンピテンシー）に含まれない資質・能力 A も，含まれない資質・能力 B もあると仮定した方がよい。なぜならば，コンピテンシーは，コンピテンシを発揮する際の具体的能力の要素として，コンピテンシの概念を果たす種々の場面・状況から抽出されたからであり，コンテンツから抽出されたものではないからである。人間の環境への適応能力であるコンピテンシが，場面・状況・時代によって変化することにも起因する。

4-2. コンピテンシーベース教育でのコンテンツ不使用の可能性

コンピテンシーの達成が最初に目標とされると，それに関連した「資質・能力」が選ばれ，その「資質・能力」を育成する教科のコンテンツが選ばれる。その場合，最終的にコンピテンシーの達成につながらないとされるコンテンツ（資質・能力 A に含まれるが資質・能力 C に含まれない）はカリキュラムから外れる可能性がある。一方，コンテンツから得られる「資質・能力」が提示され，そこからコンピテンシーにつなげる手段が講じられれば，コンテンツから最終的にコンピテンシーにつながる。このようなことを考えると，コンテンツのそれぞれがどのように資質・能力につながるかを明示していないと，カリキュラムから除かれることが生じるであろう。多くの場合，教科が目指す資質・能力は示されているが，コンテンツによってどのような資質・能力が達成されるかの記述は目立たない。特に，教科内容に該当する知識は内容知として資質・能力に該当するが，知識だけではそれがどういう場面で生きるかを知ることはできない。表5に示すようにコンピテンシーは方法を扱える汎用的な能力であるので，コンピテンシーのためコンテンツが使用されない可能性も否定できない。

4-3. コンピテンシーベースの教育のさらなる展開によって生じる教科とコンテンツの変化

コンピテンシーベースの教育がさらに展開され，コンピテンシー育成が目標化されることで，教科内容が手段化される可能性は否めない。手段化できない教科内容はカリキュラムに含まれない可能性があることについて，前節で述べた。あるコンピテンシー育成につながる教科内容が見つからない場合，教科から今まで知られていなかった教科内容と資質・能力を抽出したり，合成したりする可能性もあるだろう。これを複数教科から同時に行ったりすることがあるかもしれない。このようなことから，新しい教科が生まれるとか，教科横断的なことが進むかもしれない。たとえば，将来的に宇宙での生活が人間にとって重要になった場合，コンピテンシーとして，「宇宙で快適に生活できる能力」が加わったとする。その場合，教科内容として様々なことが必要であろうが，そのような教科内容を全て包含した「宇宙生活」という教科が生まれなくてもいい。これは目指すコンピテンシー

によってコンテンツが組織化された教科が生まれる一つの例であろう。その場合には、教科間の関係性についての研究も必要であろう²⁷⁾。また、教科と教科内容からどのような資質・能力が生まれるかを考えることは、コンテンツとコンピテンシーの連携が必要であろう。

5. 結論

本研究によって得られた結論を以下にまとめる。

- (1) コンピテンス(competence)とコンピテンシー(competency)の意味は、簡易な辞典には同義が記載されている。その例として、fitness, ability; ability to do something; the ability for a taskが見られる。
- (2) 詳細な辞書では、コンピテンス(competence)の意味は「competentである資質またはその状態」とある。「十分な知識、判断、スキル、または精神力をもつ資質またはその状態」の意味も持つ。
- (3) competencyがcompetenciesという複数で書かれていることも含めると、competenceが複数のcompetencyという構成要素からできていることが分かる。つまり、competenceは全体像であり、competencyはcompetenceの特定の構成要素のことである。
- (4) コンピテンシー(competency)は様々な文脈と場面で環境に適合する能力であり、文脈と場面で異なる。
- (5) コンピテンシー(competency)だけを求める教育制度が進みすぎると、重要なコンテンツ(contents)でもコンピテンシー(competency)につながらないことを理由に使われないことが有り得る。
- (6) コンピテンシー(competency)にすぐにつながらない重要なコンテンツ(contents)の存在とその扱いを考察することが必要である。
- (7) コンピテンシー(competency)が駆動力となって、教科横断、教科統合、新教科創生が進む可能性もある。
- (8) コンテンツ(contents)とコンピテンシー(competency)のカリキュラムでの連携が求められる。

参考文献

- 1) D. S. Rychen, L.H. Salganik, Eds., “Key Competencies for a successful life and a well-functioning society,” Hogrefe & Huber (2003).
- 2) 立田慶裕監訳, 今西幸蔵, 岩崎久美子, 猿田祐嗣, 名取一好, 野村和, 平沢安政訳, 『キー・コンピテンシー——国際標準の学力を目指して』, 明石書店 (2006).
- 3) 二宮皓, 中矢礼美, 下村智子, 佐藤仁, Competency-based curriculumに関する比較研究, カリキュラム研究, 第13号, 45-59 (2004).
- 4) J. Gervais, The operational definition of competency-based education, Competency-based Education, 1, 98-106 (2016).
- 5) K. C. Koutsopoulos and K. Doukas, SoFIA: From a content-based to competency-based educational paradigm, 33(8), 10-22 (2020).
- 6) 鈴木誠, コンピテンス基盤型教育の動向と日本の理科教育への導入の可能性—理科教育を通して育成すべき資質・能力とは何か—, 理科教育学, 60(2), 235-250 (2019).
- 7) 黄福涛, コンピテンス教育に関する歴史的・比較的研究—コンセプト, 制度とカリキュラムに焦点をあてて—, 広島大学高等教育研究開発センター大学論集, 第47集, 1-18 (2011).
- 8) 松尾知明, 『21世紀型スキルとは何か: コンピテンシーに基づく教育改革の国際比較』, 明石書店 (2015).
- 9) 奈須正裕他, 『教科の本質から迫る コンピテンシーベースの授業づくり』, 図書文化 (2016).
- 10) L. M. Spencer & S. M. Spencer, “Competence at work: Models for a superior performance,” John Wiley & Sons (1993).
- 11) 梅津祐良, 成田攻, 横山哲夫訳, 『コンピテンシー・マネジメントの展開』: Competence at work: Models for a superior performance, L. M. Spencer & S. M. Spencer, John Wiley & Sons の日本語訳, 生産性出版 (2011).
- 12) R. W. White, Motivation reconsidered: the concept of competence, Psychological Review, 66, pp.297-333, 1959.
- 13) R. W. White 著, 中園正身訳, 『自我のエネルギー—精神分析とコンピテンス』, 新曜社 (1985).
- 14) D. McClelland, Testing for competence rather than for “Intelligence”, American Psychologist, 28, 1-14 (1973).
- 15) C.P. Chishimba, Content-based teacher education approach versus competence-based teacher education

- approach, *Prospects*, 31(2), 229-238(2001).
- 16) A.V. Sanchez, M.P. Ruiz eds., *Competence-based learning: A proposal for the assessment of generic competences*, University of Deusto(2008).
 - 17) A. Tahirsylaj, F. Fazliu, From content- to competence-based curricula — An educational account of curriculum policy in Kosovo, *European Education*, 53(1), 1-14(2021).
 - 18) “Concise Oxford English Dictionary,” Oxford University(2011).
 - 19) “Macquarie Concise Dictionary 7th Edition,” Macquarie(2017).
 - 20) “Sanseido’s Concise English Dictionary,”三省堂(1978).
 - 21) 『英辞郎』, アルク, 第11版 (2020).
 - 22) Merriam-Webster(<https://www.merriam-webster.com/dictionary/>).
 - 23) Indeed, CareerGuide(<https://www.indeed.com/career-advice/career-development/what-is-competency-management>).
 - 24) 胸組虎胤, 教科内容学から見た教科の学修内容と学修過程: 理科との関連も含め, 鳴門教育大学研究紀要, 35, 63-70 (2020).
 - 25) 立田慶裕監訳, 今西幸蔵, 岩崎久美子, 猿田祐嗣, 名取一好, 野村和, 平沢安政訳, 『キー・コンピテンシー——国際標準の学力を目指して』, 明石書店, p.18 (2006).
 - 26) 立田慶裕監訳, 今西幸蔵, 岩崎久美子, 猿田祐嗣, 名取一好, 野村和, 平沢安政訳, 『キー・コンピテンシー——国際標準の学力を目指して』, 明石書店, p.69 (2006).
 - 27) 胸組虎胤, 教科横断と STEAM 教育授業開発の重要性, 日本教科内容学会誌, 8, 3-16 (2022).

Meaning of Competency-Based Education and Roles of Curriculum Contents

MUNEGUMI Toratane

In recent years, “From the content-based education to the competency-based education” have become a popular topic in emphasizing education achievement. The conventional type of learning is “the content-based learning” derived from the disciplines. Each discipline has own two kinds of structures: syntactic structure and substantial structure, which have been proposed by Schwab. The original meaning of ‘Competence’ is quite similar to that of ‘Competency’. And these words mean ‘fitness’ and ‘capacity’ and are derived from ‘competent’. However, White added to the word ‘Competence’ a new psychological and evolutionary meaning, which are presented in the sentence “competence will refer to an organism’s capacity to interact effectively with its environment.” ‘Competence’ has an overall meaning of capacity of organisms, but ‘Competency’ has a refined meaning, viewpoints of ‘Competence,’ and a kind of professional ability. ‘Competencies’ are tangible elements of ‘Competence.’ Although ‘Competence’ and ‘Competency’ may propose the important viewpoints of the educational achievement, ‘Contents’ are still absolutely necessary for ‘Competence’ and ‘Competency’ as well as learning and teaching.